

平成二十六年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一〇回大会案内・要旨集

期日 十一月八日(土)・九日(日)・十日(月)
会場 弘前大学教育学部

平成二十六年年度冬季 全国大学国語国文学会 第二一〇回大会案内

○同封の葉書に出欠をご記入の上、十月二十日(月)までに必ず着くようにご返送ください(「欠席の場合も必ずご返送をお願いします」)。

○十一月八日(土)の、昼食代(一、〇〇〇円/委員のみ)、懇親会費(一般・八、〇〇〇円、大学院生・六、〇〇〇円)、レジユメ資料代(一、〇〇〇円)、十一月九日(日)の昼食代(一、〇〇〇円)、十一月十日(月)の文学実地踏査費用(六、〇〇〇円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/〇三二〇―九―一四九四七、口座名称/全国大学国語国文学会第110回大会)にて十月二十日(月)までにお振り込みください。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いします。

〒036―8560 弘前市文京町一番地

弘前大学教育学部 郡千寿子研究室

Eメール chizuko@cc.hirosaki-u.ac.jp

FAX 〇一七二―三九―三三三六

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒370―1193 群馬県佐波郡玉村町上之手一三九五―一

群馬県立女子大学文学部国文学科北川研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.gpwu2014@gmail.com

FAX 〇五〇―二七三〇―〇〇八六

○弘前大学附属図書館は、八日(土) 九日(日)は10～17時開館で、一般の方も利用できます。

弘前大学資料館は、八日(土) 10～16時開館(日曜は閉館)しています。ぜひご来場ください。

第一日 平成二十六年十一月八日(土) 弘前大学教育学部

常任委員会	(11時00分～11時30分)	教育学部二階	202
委員	会(11時30分～12時30分)	教育学部二階	203

大会

受付 12時30分～

開会 13時00分

会場 教育学部一階大教室

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

犬飼 公之

開会の辞

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

中西 進

会場校挨拶

弘前大学学長

佐藤 敬

青森県知事挨拶

青森県知事

三村 申吾

公開シンポジウム (13時10分～17時00分)

テーマ 「北」のものがたり―「北」の思考・心性の北方的なるもの―

基調講演 (13時10分～14時10分)

神に祀られた藩主―弘前藩四代藩主津軽信政の明と暗―

弘前大学名誉教授・弘前市立博物館長 長谷川成一

パネルディスカッション (14時30分～17時00分)

パネリスト

北東北と中世文学―中央との関連を中心に―

専修大学教授

石黒吉次郎

描かれた北海道―新天地・国策・流れ者―

北海道文教大学教授

神谷 忠孝

日本仏教史における北の意義―北方地域の開拓と開教―

北海道教育大学特任教授

佐々木 馨

コーディネーター・司会

東北大学教授

佐倉 由泰

懇親会（18時00分～20時00分）

会場 翠明荘（明治二十八年建築、屋久杉一枚板天井など意匠凝らした内装の料亭） 弘前市元寺町六九（電話〇一七二・三二一・八二八二）
会費 一般 八、〇〇〇円 大学院生 六、〇〇〇円

第二日 十一月九日（日） 受付開始9時30分 弘前大学教育学部

研究発表会《A会場》 会場 教育学部一階大教室 総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

午前の部（9時50分～12時00分）

『更級日記』における死と月―「ゆゆし」き月影をめぐって―

発表者／東洋大学大学院生

司会／早稲田大学非常勤講師

市東 あや

吉井 美弥子

藤壺の「御かはり」としての王命婦―冷泉帝の御代安泰の論理―

発表者／日本学術振興会特別研究員

司会／早稲田大学非常勤講師

大津 直子

吉井 美弥子

〈休憩〉

倭訓栞の和歌

発表者／弘前大学教育学部専任講師

司会／駒澤大学教授

平井 吾門

萩原 義雄

昼食・休憩（12時00分～13時00分）

午後の部 (13時00分～15時50分)

シフエール訳『源氏物語』における親子関係—ombreの表象するもの—

発表者／日本学術振興会特別研究員・早稲田大学大学院生
司会／立教大学教授
常田 慎子
小嶋 菜温子

近代の『竹取物語』流布について—教科書、絵本を中心として—

発表者／弘前大学大学院生
司会／立教大学教授
小西 周平
小嶋 菜温子

〈休憩〉

「師表」から「歴史」へ—明治二〇年代初頭における西鶴流行現象と内田不知庵

発表者／木更津工業高等専門学校講師
司会／清泉女子大学教授
大貫 俊彦
佐伯 孝弘

イメージは文学といかに関わるか—文学の発生に関する一私論—

発表者／苫小牧駒澤大学教授
司会／大正大学特命教授
林 晃平
三角 洋一

研究発表会《B会場》

会場 教育学部二階大教室

総合司会／本学会常任委員・大東文化大学教授

藏中 しのぶ

午前の部 (9時50分～12時00分)

『日本霊異記』の地名

発表者／元國學院大学大学院特別研究生
司会／群馬県立女子大学教授

岩井 護
北川 和秀

〈休憩〉

大英博物館所蔵『伊吹童子』考―弥三郎と酒吞童子の造形に着目して―

発表者／日本大学大学院生

荒川 真一

司 会／慶應義塾大学教授

石川 透

コミュニケーションとしての殺人―柳美里『ゴールドラッシュ』論―

発表者／早稲田大学大学院生

康 潤伊

司 会／駒沢女子大学特任教授

松村 良

授賞式《A会場》 (15時50分～16時00分)

研究発表奨励賞

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員・弘前大学教授

郡 千寿子

第三日 十一月十日(月)

文学実地踏査 テーマ「太宰治の故郷を歩く」(参加費用六、〇〇〇円には、昼食代、入館料等を含みます)

弘前駅東口9時集合―太宰まなびの家―金木 斜陽館・太宰疎開の家―三内丸山遺跡―青森県近代文学館―新青森駅(17時頃予定)
―青森空港(17時半頃予定)

平成二十六年冬冬季

全国大学国語国文学会 第一一〇回大会 公開シンポジウム

「北」のものがたり―「北」の思考・心性の北方的なるもの―

「北」の持つ地理的特性、風土的特性あるいは文化的特性のなかで生まれ、語られたものの価値とは何であろうか。かつて蛮夷の国として恐怖、怪異の対象であり、一方では都人の憧れの歌枕の国でもあった「北」は、そのうち、制圧・支配の対象となり、物的・人的資産の供給地となる一方、景観・風景や名勝を提供する国々ともなった。

こうした環境と歴史の「北」に生まれたものがたりにおいて、「北」はどのように捉えられ、描かれているのだろうか。そこに「北」の独自性は、はたして存在するのであるか。

物語、小説、伝説、芸能、宗教、思想、政治経済史にみられる北の思考、北の心性におけるその北方的なるものとは何か、という問いを通して、「北」に対する意識、表象の中から「北」の存在意義を確かめたい。

なお、ここでの「北」の範囲は、北奥、北東北を中心としつつ、東北以北、北海道をも含む地域を視野に入れている。

基調講演

神に祀られた藩主―弘前藩四代藩主津軽信政の明と暗―

弘前大学名誉教授・弘前市立博物館長 長谷川成一

パネルディスカッション

パネリスト

北東北と中世文学―中央との関連を中心に―

専修大学教授

石黒吉次郎

描かれた北海道―新天地・国策・流れ者―

北海道文教大学教授

神谷 忠孝

日本仏教史における北の意義―北方地域の開拓と開教―

北海道教育大学特任教授

佐々木 馨

コーディネーター・司会

東北大学教授

佐倉 由泰

平成二十六年年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一〇回大会

研究発表会

【研究発表会／A会場 午前】

『更級日記』における死と月

—「ゆゆし」き月影をめぐって—

東洋大学大学院生 市東 あや

姉の死の後、遺された姪たちを引き取った作者は、荒れた家の屋根から漏れ出る月光を「ゆゆし」と感じ、月光が当たらないように袖で姪の顔を覆うという行動をとっている。この行動の動機についての見解は諸注釈でも分かれているが、いずれにせよこの場面では「月」が作者の姉の、ひいてはその遺児である姪たちの死を連想させるモチーフとして強く意識されていると考えられる。

月を見ること、月光に当たることを忌避する思想は、日本古来のものであるとも、『白氏文集』の詩の一節によるとも言われ、今日でも意見の分かれるところである。一方で、『源氏物語』夕顔巻などにも例のあるように、物語の人物の死の場面に「月」が描かれることは珍しくない。

振り返って『更級日記』の「月」をみていくと、作者十三歳から二十歳頃にかけての少女期にかけてはあまり月の描写は多くなく、その中で乳母と姉の死に関わる部分には「あはれ」「ゆゆし」などの語と共に月が描かれている。これらの死にまつわる「月」の描写

は、宮仕え以後の日記に多くあらわれる賞美の月と比べて、明らかに表現の質を異にしているといえよう。月光に照らされることを「ゆゆし」とする叙述は、作者の少女期における「月」のイメージを体現しているのではないか。

そこで本発表では、「月の顔見るは忌むこと」という民俗思想、また平安文学にあらわれる死のモチーフとしての「月」の表現を踏まえながら、『更級日記』の「月」に見える作者の心情について考察していく。作者の晩年の回想という形で描かれる日記文学において、鄙の地に暮らした夢見がちな前半生と、都に出てからの後半生で、作者が意図的に「月」のモチーフを変化させているのだとすれば、『浜松中納言物語』や『夜の寝覚』の作者とも目される菅原孝標女の、物語作家的側面を垣間見ることができのではないだろうか。

藤壺の「御かはり」としての王命婦

—冷泉帝の御代安泰の論理—

日本学術振興会特別研究員 大津 直子

藤壺薨御の後、光源氏は密通の秘事を冷泉帝に漏らしたか否かを王命婦に質す。王命婦は藤壺が秘事を守りぬいたこと、むしろ実父に礼を尽せぬ帝を案じていたことを明かす。「薄雲」巻のこの場面をもって、禁忌の恋を支え続けた王命婦は物語から退場するのである。

本発表がまず着目するのは、彼女が「御匣殿のかはりたるところに移り」、「曹司」を賜っていたという事実である。この点は御匣殿別当の、①後任とする説、②直廬を継承したとする説などがあるが、結論が出ていない。十世紀後半以降、御匣殿別当は事実上の天皇の侍妾となつてゆく。ところが王命婦は「賢木」巻で藤壺に従つて出

家しており、侍妾となったとは考えにくい。そもそも、尼である彼女がなぜ宮中に直廬を賜っているのか。なぜ物語は、彼女の最後の登場場面で御匣殿別当との関わりに言及するのか。現在の読みでは合理的な説明が成り立たないこの問いには、物語の深層に底流する古代的発想からアプローチする必要がある。

御匣殿の職掌である装束裁縫とは、本来布帛を裁ち縫うことを以って人型を象る行為でもあった。とりわけ天皇の御衣は王の祭祀権と密接にかかわっている。『小野宮年中行事』所引「弘仁神祇式」には、御匣殿が天皇の活力を復活させるための儀式である鎮魂祭に奉仕したとある。また、『延喜式』には、縫殿寮の神の筆頭として「御匣殿の神」が挙げられている。天皇の御衣の裁縫は王権祭祀の一環だったと言える。

以上の点を踏まえ、本発表では帝が出生の秘密を知った事実と王命婦が御匣殿にまつわって語られる事実との間に強い因果関係があると見る。具体的には、王命婦の最後の記事が、冷泉皇権を賦活させ、御代の揺らぎを収束させる物語表現として機能していることを説きたい。その上で、生前の藤壺が自らの「御かはり」として王命婦を帝に近侍させた真意は、その即位実現と後の御代の安泰を祈る呪術行為にあった、という結論を導きたい。

倭訓栞の和歌

弘前大学専任講師 平井 吾門

近世中期に編纂された「倭訓栞」は、初期稿本である「自筆本」、刊行直前の姿を示す転写本「清逸本」、完成品である「整版本」が知られており、近代国語辞書に大きな影響を与えた近世の三大国語辞書の一つとして認知されているが、その成立過程や具体的な特色に関する研究は進んでいない。本発表は、倭訓栞の語釈に引用され

る諸用例の中で、明らかに特異な扱いを受けている和歌（短歌）に注目し、その内実を探ることで倭訓栞の成立過程の一端を説明することを目的とする。

倭訓栞には、国書や漢籍、仏典からの豊富な用例が確認できるが、語釈では原則として改行は行われず、必要に応じて「○」記号で段落区分が為されており、用例の多くは部分的な抄出に留まる。しかし、和歌に限っては、一首丸ごと抜き出した上で、改行及び一字下げを行う独自の体裁で掲出する例が散見される。一行に二行以上を収めないという罫線の使用原則も、和歌掲出の際には守られておらず、一行に押し込められている点も指摘できる。

これを踏まえて、自筆本・清逸本・整版本各々に見られる和歌を抜き出し、「その典拠（歌集等）」及び「見出し語との関連性」を指標として、各本ごとの特色を明らかにする。その上で、適宜同著者による随筆「鋸屑譚」との比較を行いつつ、諸本間の相違点について考察することで、倭訓栞の編纂態度が変化する様子を追う。以上の調査を通じて、次の結論を得た。

① 自筆本では、典拠や語義が疑わしい和歌であっても採録する。清逸本では、それらが整理されるときにも和歌が増大して多角的な表現が為される。整版本では整理が進むが、新規に追加される和歌も僅かに存在し、編纂方針を特徴づける。

② 倭訓栞の編纂に伴い、和歌の典拠とした類題集や歌集が増強され、初出の追求や実証性の確立が進む。それにより倭訓栞は、「雑多な情報を含む単語集」から「学術的な考察を伴う辞書」へと編纂態度が変化していることが分かる。

【研究発表会／A会場 午後】

シフェール訳『源氏物語』における親子関係

— ombre の表象するもの —

日本学術振興会特別研究員・早稲田大学大学院生 常田 慎子

『源氏物語』では、特定の人物に同じ修飾語が繰り返し用いられる、ある場面に同じ語が何度も用いられたりすることで、その人物の性格や場面の全体像を規定していくということがある。しかし、『源氏物語』を翻訳するとき、必ずしもそれら全てが同じ単語を使って翻訳されるというわけではない。その意味で、『源氏物語』の世界そのものをそっくり移し替えることはできないが、一方で翻訳が原文を離れて新たな意味世界を構築するということも十分に考えられる。すなわち、原文では共通の単語が使われておらず、関連性を見いだしにくい言葉が、同じ単語を用いて翻訳されるとき、特にそこに一定の条件が認められうる場合、そのような単語の選択に新たな意味を見いだすことが可能になるのではないかと発表者は考える。

本発表では、ルネ・シフェール (René Sieffert) による仏訳『源氏物語』 (*Le Dit du Genji*) における ombre (複数の意味があるが、一義的な意味では「かげ」という語の用いられ方を中心に検討する。同語は『源氏物語』本文中の「かげ」の訳語として、主に親子関係に用いられ、子に対する親の庇護や子から見た親の面影を意味する場合などに用いられている。また、「かげ」のみならず「面影」や「たま(魂)」の訳語としても、用例は少ないが、主に光源氏、桐壺帝、桐壺更衣の関係の中で使用が認められ、大君の詠んだ和歌の中にも用いられている。特に本発表では、特定の人物に繰り返し用いられる例として、光源氏と血縁的つながりのある人物間で当該訳語が用いられるケースと、八の宮、大君、中の君の関係で用いられているケースに焦点を当てる。ombre は、場合によっては、「闇」や「死」など、暗いイメージをも表しうる単語である。ombre

が、これら二組の親子間に多く用いられることの意味を、シフェールの作品理解につなげて考察する。

近代の『竹取物語』流布について

— 教科書、絵本を中心として —

弘前大学大学院生 小西 周平

『竹取物語』は「だれもが幼い時に一度は聞いたり読んだりしたことがある」といった形容で説明されることがある。松谷みよ子は絵本「かぐやひめ」において「日本人ならば一度は出会わなくてはならない物語」と言及した。確かに『竹取物語』は昭和のはじめに使われた国定教科書より、「かぐやひめ」と名を変えて学校教育の場で使用されてきたのを皮切りに、以後、絵本「かぐやひめ」か、あるいは古典教材としての「竹取物語」のいずれかで、この物語に幼少期から学童期において触れることが多いと考えられる。

しかし、学校教育において『竹取物語』が「定番の昔話」のように扱われるようになった理由は、その学校教育自身が流布した「かぐやひめ」が要因ではないのだろうか。国定教科書の編纂趣旨取扱には「多くの男に戀される場面を削除して児童むきの讀物として改作したもの」と記されており、その編纂意図が『竹取物語』を当時の児童に向けて広めるためであったと考えられる。また、本文の内容について「『竹取物語』に拠つたものでありますから、説明の必要は有りませんが……」となつていことから、当時の『竹取物語』の普及具合もうかがうことができる。

一方で絵本などにくつか散見されるものと同じく国定教科書内では「天皇」を「とのさま」とあらためられているように、必ずしも各々の時勢にふさわしいとは判断されずに、変更された箇所もみられる。何故、このように変更をしてまで、『竹取物語』が流布されていっ

たのか。本発表では現在までの教科書教材、絵本としての取り上げられ方に注目しながら、『竹取物語』の受容について一考を述べる。

「師表」から「歴史」へ

—明治二〇年代初頭における西鶴流行現象と内田不知庵

木更津工業高等専門学校講師 大貫 俊彦

本発表は明治二〇年代初頭における井原西鶴の流行現象に関して、これに文芸批評という立場から関わった内田不知庵(後の魯庵)の西鶴評価とそこで提示された同時代的な意義の変遷について考察するものである。

これまで不知庵の西鶴評価は、野村喬氏らにより、尾崎紅葉や幸田露伴が西鶴の文体を模した小説を発表する一方で、文体よりも着眼の良さに注目し、写実主義的文学観のもとで西鶴が描く「人情の微」や「情致」を高く評価したと指摘されてきた。

ところで、右の研究ではほとんど議論されないが、本来この西鶴評価の前提には、西鶴が注目を浴びる前からその作品に言われてきた二つの問題が存在する。それは、①西鶴の説話構成が極めて不徹底で、②その好色物が猥褻だというものである。本発表では、明治二二年の時点で小説の「師表」とまで説いた不知庵の西鶴評価のなかで、これらがどう捉えられているのかを批評における議論の進め方に注目しながら検証する。

ここで示唆的なのは、不知庵の批評には西鶴と馬琴を巧みに対比させて前者を評価するという構図が見られるということだ。そこでは馬琴の文章や卓越した構能力を批判し、西鶴が穿つ「人情の秘奥」が評価される。つまり、西鶴は馬琴の評価をめぐる文学観の表出として、裏を返せば馬琴に支えられる形で論じられていたことが分かる。

しかし、明治二三年に不知庵が西鶴本の翻刻に携わるようになるとその評価には明らかな変化が見られる。それまでの「師表」から「歴史的な作品」へと評価が変わり、西鶴の作品は「端物(スケッチ)」とされ、伏せ字も施される。西鶴流行現象の最中で見られるこの転換は、個人的な文学観の変化も考えられるが、本発表ではここに西鶴の作品が持っていた同時代的なリアリティの喪失を見出す。そこでは「結構」対「写実」という構図で文学を論じる枠組みが失効し、それと同時に歴史的な作品としての西鶴評価が生じたことを指摘する。

イメージは文学といかに関わるか

—文学の発生に関する一私論—

苫小牧駒澤大学教授 林 晃平

文学は核となる出来事あるいは事象があり、それに感情を交えて言語に置き換えることよって成り立つ。それはイメージを以って形象化され、口頭あるいは文字化されて伝承されていく。しかし、イメージそのものが文学を生み出すという逆の場合もあるのではないか。イメージがことばを生み出し、文学を生み出していくという可能性について考えたい。

例えば近世になって登場する亀趺という亀の形象を台座に持つ異形の石碑がある。この亀趺のいくつかには伝説が付随している。長崎市の大音寺のそれは、碑文をすべて読み下すと亀が動き出すという。鹿児島県宮之城町の宗功寺跡墓地にある「祖先世功の碑」も、碑の文を一度も間違わずに読み上げたら亀が動き出して川内川の水を飲みに行く、また、姫路市の随願寺も、碑文を一字の誤りもなく読むと石碑の亀が動く、という。亀趺の異形の亀に触発されて発生したこれらの伝説の成立は、当然ながら亀趺を持つ石碑が建立され

る江戸期以降である。そして、地域を異にするこれら三例に共通するのは、碑文を読むことで亀が動くことであるが、互いの影響関係は見出しがたい。しかし、こうした簡潔な伝説が松江市の月照寺の場合には些か異なっている。記録された例としては小泉八雲のエッセイのみであるが、夜な夜な亀が池で泳ぐので、亀の頸を折ることで鎮めたというという伝承は、ニメートル近い巨大な亀の威圧感のため、人食い大亀を鎮めるために亀の石碑が建立されたという異伝すら持つ。そこに伝説から文学が成立していく過程を見るのである。この倒立した因果関係は、文学が単なることばや文字だけでなく、そこから紡ぎ出されるイメージを前提に説かれる場合があることを示しているといえる。

なお、本発表は科学研究費助成事業（課題番号24520229「図像と文学形成の関連についての基礎的研究」）の成果の一部である。

【研究発表会／B会場 午前】

『日本霊異記』の地名

元國學院大学大学院特別研究生 岩井 護

『日本霊異記』は、上・中・下三巻の百三十六話（上巻三五・中巻四二・下巻三九話）からなる日本最初の仏教説話集で、そこには多くの「地名」が出てくる。

それらの中に現れる「地名」は、延べ百九十一（上巻六六・中巻五四・下巻七一）を数え、これを「国」と「郡」との「異なり語数」で見ると、「大和」「紀伊」などの国名が三十六、「高市」「名草」などの郡名が八十三となる。

また、「熊野の村」や「弥氣の里」のような「村」や「里」のほか、「富岷嶺」や「大井河」といった「山」や「川」なども数える。その数は、さらに増える。

一方、和銅六年（七一三）の「畿内七道諸国郡郷名、着好字」という官命および、民部省の「凡諸国内郡里等名、並用三字、必取嘉名」との行政地名表記の改正によって、それまで、一字または三・四字で表していた「地名」を、字義のよい二字で表すことになる。

だが、奈良時代の国語資料と目される『日本霊異記』には、わずかながら「泉郡」などの一字表記や、「阿育地郡」などの三字表記が存在している。また、表記についても、「阿倍(村)」「宇佐(郡)」など、多くは万葉仮名で表される反面、「輕嶋」「蓼原」など、万葉仮名以外の表記も少なくない。

今回は、『日本霊異記』の「地名」について、『風土記』など、関連文献との対照をはじめ、「寺名」や「人名」にも言及しながら、幾つかの課題を整理して、『日本霊異記』の「地名」に関する様相を纏めるものとする。

大英博物館所蔵『伊吹童子』考

— 弥三郎と酒吞童子の造形に着目して —

日本大学大学院生 荒川 真一

酒吞童子の出生を描く物語に『伊吹童子』がある。この物語は酒吞童子の故郷を伊吹山、暴虐を働く地を大江山に設定し、酒吞童子が伊吹山から大江山に至るまでの過程を描くものである。物語は室町後期から江戸初期にかけて成立し、酒吞童子像の享受を考えるにあたり重要な位置にあるといえよう。

本発表では大英博物館所蔵本（新日本古典文学大系所収）に焦点

を当てる。本絵巻は完本として重要な位置にあるにも関わらず、具体的本文分析は充分になされてこなかった。そこで、酒吞童子とその父である弥三郎の造形に着目し、本絵巻の特徴を他の伝本類との比較をもって考察することとする。

酒吞童子は成長するに従い、弥三郎の持つ性格を顕現させることから、〈酒吞童子〉Ⅱ〈弥三郎〉という関係を見出せる。この関係により酒吞童子と弥三郎の造形は密接に結びつくものといえるが、弥三郎の造形には伝本間で差が見られる。他の伝本類は蛇神的性格をもった荒ぶる神として造形されるが、本絵巻ではそのような神性は薄れ、反社会的存在としての側面が強調される。さらに、本絵巻では前半の弥三郎の物語において、〈弥三郎〉対〈大野木（弥三郎の義父）〉という対立構造のもと、妖怪退治譚としての酒吞童子説話を再現することにより、〈酒吞童子〉Ⅱ〈弥三郎〉という関係を強調している。だが、そのような弥三郎の性格を継承するだけに留まるのであれば、本絵巻における酒吞童子は地方の豪族に討伐可能な存在となり、妖怪退治譚における朝敵とはなりえない。他の伝本類では酒吞童子は最澄との対立による仮死、大江山における再生を経て、弥三郎の性格を完成させる。すなわち、この酒吞童子は荒ぶる神である弥三郎そのものといえる。対して、本絵巻では最澄との対立前に弥三郎の性格を完成させ、死と再生の過程を踏ませる。これにより弥三郎を超越した反社会的存在として、妖怪退治譚へと繋がる酒吞童子を造形しているといえる。

コミュニケーションとしての殺人

—柳美里『ゴールドラッシュ』論—

早稲田大学大学院生

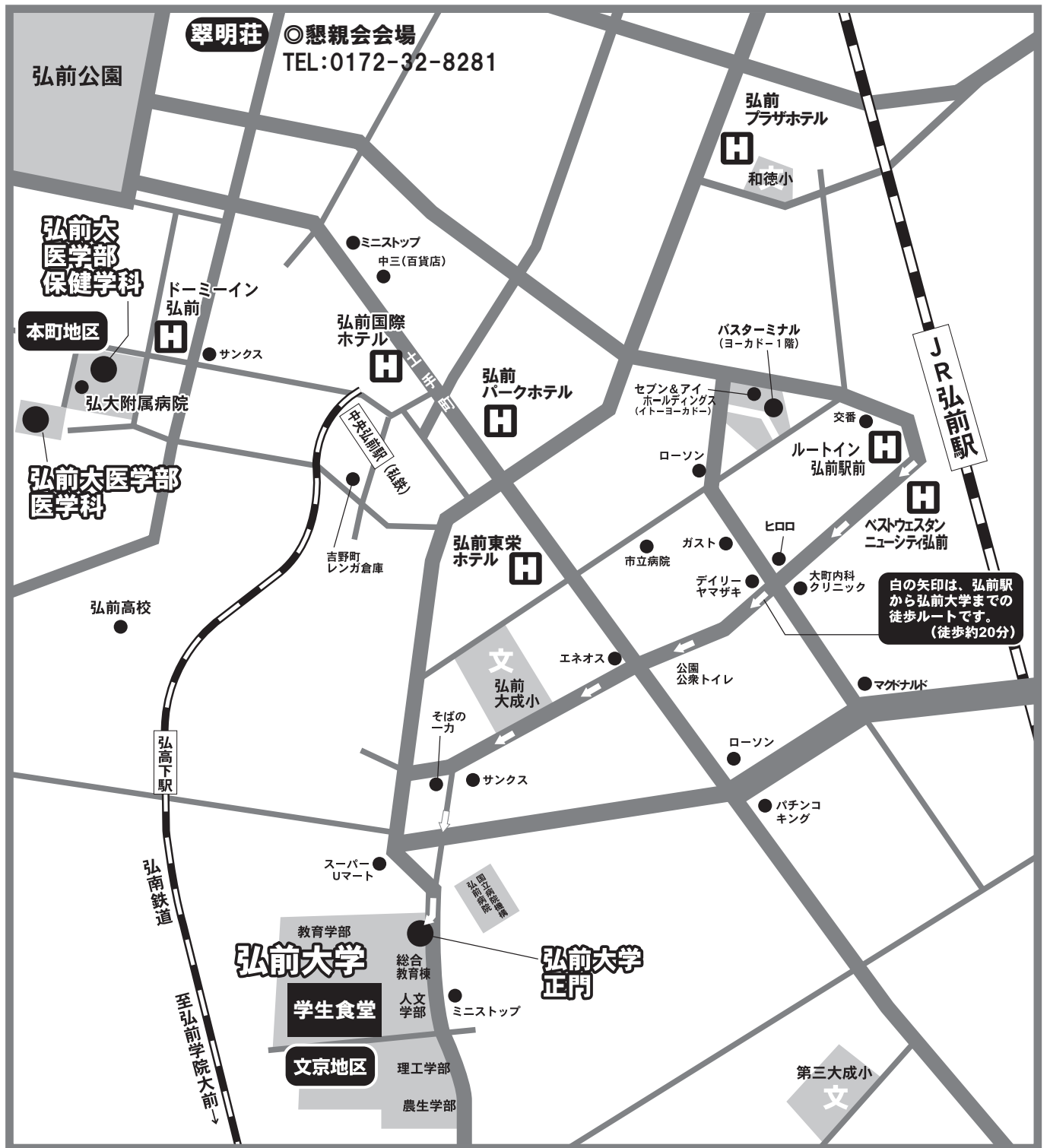
康 潤伊

柳美里『ゴールドラッシュ』を「一四歳の少年による父殺しの物

語」と概括したとき、読みは二つの方向に収斂されてしまっただろう。つまり、作中の少年を神戸連続児童殺傷事件の加害者と重ねる方向と、普遍的なエディプスの父子の対立とその超克の物語とする方向である。これは神戸の事件が本作の執筆背景にあることなどに起因するが、見落とせないパラテキストは他にもある。少年を描いているのは女性作家であるという点と、作者である柳美里は在日朝鮮人（本発表においてはこの語を、朝鮮半島にルーツを持つすべての人を指して用いることとする）であるという点である。今まで後景に置かれてきたこれらの点に着目し本作を読んでいくことで、新たな読みを提示していくことが、本発表の目的である。

まず、柳美里の「殺人ほど他者に入り込む行為はない」（切通理作「柳美里」を演じられなくなったら、死ぬしかない―柳美里ロング・インタビュー―『文學界』二〇〇〇・九）という認識を参照し、この言説をテキスト分析から補完することで、少年による殺人の内実を明らかにする。殺人は憎悪によるものではなく、他者と信頼関係を結ぼうとする行為だったのである。

また柳は「虚構化し易いため少年の方が書きやすい」（筒井康隆・柳美里「対談 魂を襲った大地震―『ゴールドラッシュ』をめぐる―『新潮』一九九九・二）と語っている。作中においてこの「虚構化」はどこに表れており、またそれが何をもたらしたかについて、先に明らかにした殺人の内実を踏まえながら考察する。そして少年が信頼関係を結ぼうとした他者たちに共通する点―彼・彼女らが在日朝鮮人もしくはそうした人々と近い人間であったことと、少年が作中において誰からも漢字名で呼ばれず、また語り手からも固有名で呼ばれないこととを合わせて考察しながら、『ゴールドラッシュ』が内包していた、柳美里の作品史における新たな意味を見出ししていく。



<弘前市内タクシー連絡先>

北星交通 TEL:0172-33-3333

グリーン交通 TEL:0172-28-8080

三ツ矢交通 TEL:0172-32-2281